

# 教育研究業績書

2017年05月29日

所属：応用音楽学科

資格：助教

氏名：竹原 直美

研究分野	研究内容のキーワード
音楽療法、芸術療法、特別支援教育、文化情報学	子ども、芸術表現・コミュニケーション、音声映像、心理・生体情報、評価・分析・可視化
学位	最終学歴
博士（文化情報学）、修士（文化情報学）、学士（音楽芸術）	同志社大学大学院 文化情報学研究所 博士後期課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
1. 創造的な学習形態	2013年9月から	音楽療法の多様な臨床場面を想定した新たな楽曲・素材・教材の創作を中心とした授業を展開している。
2. 音楽観・音楽療法観を重視した授業	2013年4月から	マインドマップを用いた評価・学習法を導入し、音楽と自己・社会とのつながりを描くことにより、音楽観・臨床観に気づく・みつけるための授業を展開している。
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
1. 音楽心理学	2015年4月から	音や音楽の受容から表出に至るまでの過程を、体験的に学べるような手作り教材を準備している。
2. 音楽療法の研究法（評価・分析法）のための教材	2014年4月から	音楽療法場面の多様な現場・ニーズに対応できるように、映像・音声情報の収録・分析、文章分析、音響分析、心理・生体情報の分析を行うことができるよう研究環境を準備しており、学際的な視点で臨床研究が行えるような教材を作成している。
3. メディア教材	2013年4月から	音楽療法の事例学習において、再現性の高い視聴覚教材を提供し、学生・教員で議論を行いながら、共に療法的視座を深めていける教材を制作している。
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 地域の子育て支援のクリスマス会での音楽演奏・交流（授業）	2016年12月21日	鳴尾地区の子育て支援のクリスマス会で、ハンドベルや歌の演奏、ふれあい遊び、リラクゼーションなど母子の交流を目的とした活動を学生自ら企画・実践し、本番に向けての指導を行った。
2. 保護者を対象とした音楽療法の講演	2016年11月21日	西宮養護学校の保護者・教員を対象に、「子どもの音楽療法」と題して、子供の音楽療法の実践内容や臨床の視点について、ロールプレイ・体験を交えながら講演を行った。
3. 「第一回理系女性人材育成セミナー」での講演	2009年6月27日	発表タイトル「音楽療法の研究者を目指して」～今後注目される臨床医工学・情報学分野の職種における研究と実践～関西五大学連携事業主催の行事において、自らの大学院での研究生活や・音楽療法の臨床・研究・教育に関する仕事の経験について語り、女性が専門的な知識を身につけることの重要性と、音楽療法研究の今後の展望について講演した。講演の休憩時間には、セミナーの意図にあった音楽演奏を企画・提供した。
4. 介護福祉分野の教育機関における音楽（音楽療法）の授業	2009年4月～2011年9月	介護福祉の現場に関連する音楽療法の理論・実践の基礎学習と、学生の馴染みのある音楽や学習素材を活用し、学生自らが生活にどの様に音楽を取り入れているかを認識したり、音楽による心理的变化を体験できるような教材を使用した。また、臨床場面で好まれる音楽を用いてグループ別に発表を行うなどの実践的な学習を導入した。
<b>4 その他</b>		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
1. 日本音楽療法学会認定療法士	2011年3月31日	2011年に日本音楽療法学会による認定音楽療法士を取得。 2016年の資格更新審査を経て現在に至る。（第1945号）
2. 高等学校教諭1種免許状（音楽）	2010年4月3日	平二二高一第一〇号
3. 中学校教諭1種免許状（音楽）	2010年4月3日	平二二中一第六号
<b>2 特許等</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 地域支援会議への参加	2016年より現在	本学音楽療法研究室に通う児童の本人中心支援計画（サービス等利用計画・障害児支援利用計画の西宮市における呼称）作成における支援会議に、音楽療法士として参加している。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
2. 音楽の科学研究会	2015年4月から現在	音楽-楽器-演奏者-聴取者を科学的な観点から研究したい、または関連知識を深めたいと考えている方々による勉強会の運営に携わっている。
3. ICT技術を活用した音楽療法の臨床研究	2015年4月から	本学、音楽療法研究室では、対象の音楽ニーズに合わせた楽器演奏・運動・発声支援のために、ICTを活用した臨床研究を行っている。
4. 武庫川女子大学音楽療法研究室における音楽療法の臨床研究	2012年5月より現在	本学音楽療法研究室にて、発達に心配のある児童を対象とした音楽療法を行っている。 メイン・セラピストとして7例、コ・セラピストとして7例のケースに関わり、研究室メンバーとの共同で、対象児個々のニーズに合わせた素材の開発（楽器・楽曲・視覚支援等）と臨床評価システムの構築に関する基礎研究を行っている。
5. 幼児教育機関での音楽療法	2009年5月～2010年8月	自閉症傾向で言葉の発達に心配のある幼児を対象とした音楽療法を行った。音楽療法の介入後、言葉の発達の問題が解消され園内での対人交流が良好となった。
6. 音楽教室での音楽療法と音楽療法の要素を取り入れたレッスン	2009年10月～2013年3月	不登校や様々な悩みのある対象、ダウン症、自閉症等の障がいのある児童、自閉性傾向・コミュニケーションに困難のある児童を対象とした音楽療法と、個々の発達や心理的状况に応じたピアノ・声楽のレッスンを行っていた。
7. 成人障がい者・高齢者施設での音楽療法・演奏	2008年4月～2009年3月	メイン・セラピスト、コ・セラピストとしての音楽療法、施設行事での演奏、セラピーライブ、ロビー演奏等の奉仕活動を行っていた。
8. 同志社大学 RA (Research Assistant)	2008年4月～2009年3月	生体情報計測（脳波・心電図・呼吸）に関する実験的研究に携わる。
9. 同志社大学 TA (Teaching Assistant)	2007年4月～2008年7月	「文化情報学 実験演習Ⅰ・Ⅱ」の授業補助 テキスト解析や統計解析など、コンピューターを使った実践的な授業の補助を行った。
<b>4 その他</b>		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
<b>2 学位論文</b>				
1. 音楽療法の全人的・統合的な働きとその多様な構成要素の相互関係の研究	単	2013年3月22日	同志社大学文化情報学研究科 博士学位論文	全人的・総合的な働きを前提とする音楽療法の臨床場面には、多様な構成要素の相互関係が含まれる。研究では、音楽を用いた対人援助に関する意図・価値を導くために、経験的研究、前実験的研究、系統的研究、という3つの研究の視点から探究的に調査した試みについて報告した。
<b>3 学術論文</b>				
1. 音楽学部教職課程履修学生に対するピアノ教育の取り組み—応用音楽学科における実践報告— (査読有)	共	2017年3月	学校教育センター年報, 第2号	今城道子, 一ノ瀬智子, 松本佳久子, 岩谷寿美子, 松川南海, 山本麻代, 竹原直美 教職課程履修学生を対象とした、ピアノ実技に関するアンケートの結果を報告した。教職課程の学生は、教員採用試験等の具体的な目標に即して、ピアノ実技の必要性を認識しており、熱心に取り組む姿勢に繋がっている傾向がみられた。上達に向けては、練習時間の確保と、モチベーションの維持が重要であり、上達への変化が感じられるようなスモールステップによる課題設定や、表現の楽しさを実感できるような配慮が必要であることが示された。
2. 音楽療法実習生の振り返りにおける記述の分析～経験による「学び」の変化に着目して～ (査読有)	共	2017年 (印刷中)	栄養科学研究雑誌	竹原直美, 一ノ瀬智子, 松本佳久子, 長谷川裕紀, 吉里瞳子, 青木智美 地域高齢者を対象とした音楽療法の実習生による振り返りにおける記述の計量テキスト分析を行い、経験による学びの変化を捉えることを試みた。その結果、学年ごとに用いる言葉の特徴、会話・観察視点の継時的変化を概観するに至った。
3. Development of a System Combining a New Musical Instrument and Kinect: Application to Music Therapy for Children with Autism Spectrum Disorders (査読有)	共	2016年	International Journal of Technology and Inclusive Education (IJTIE), Special Issue Volume 3, Issue 1, 2016	Tomoko Ichinose, Naomi Takehara, Kakuko Matsumoto, Tomomi Aoki, Toko Yoshizato, Ryuhei Okuno, Shinichi Watabe, Katsumi Sato, Tsutomu Masuko, Kenzo Akazawa バリアフリー電子楽器CymisとKinectを用いた『音楽と運動のプログラム』を自閉症スペクトラム児の音楽療法で活用した事例を発表した。 <a href="http://infonomics-society.org/wp-content/uploads/ijtie/published-papers/special-issue-volume-3-2016/Development-of-a-System-Combining-a-New-Musical-Instrument-and-Kinect-Application-to-Music-Therapy-for-Children-with-Autism-Spectrum-Di">http://infonomics-society.org/wp-content/uploads/ijtie/published-papers/special-issue-volume-3-2016/Development-of-a-System-Combining-a-New-Musical-Instrument-and-Kinect-Application-to-Music-Therapy-for-Children-with-Autism-Spectrum-Di</a>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
4. 重度障がい児の音楽療法における表現・コミュニケーション行動の評価・分析事例～前言語・非言語表現と音声表現の時系列関係に着目して～（査読無）	共	2015年3月17日	日本音響学会, 2015年春季研究発表会講演論文集CD-ROM, pp.1305-1306	sorders-1. pdf 竹原直美, 大浦夏光, 松本佳久子, 一ノ瀬智子, 青木智美, 吉里瞳子, 矢野環 重度障がい児の音楽療法におけるコミュニケーション行動の分析を行った。研究結果では、非言語的注意（物・楽器や人の身体をみている時）よりも、前言語的注意（臨床者の顔を見ている時）の方に音声表現との周期的な関連がみられた。一方、非言語的な注意は、音声表現と関連しなかったが、楽器表現との周期的な時間関係がみられた。非言語的動作は、楽器表現と比較して、音声表現との持続的な関連が示された。
5. 重度障がい児の音楽療法における前言語的な表現・コミュニケーションの評価・分析に関する基礎研究（査読無）	共	2014年9月5日	日本音響学会, 2014年秋季研究発表会講演論文集CD-ROM, pp.515-516	竹原直美, 一ノ瀬智子, 松本佳久子, 青木智美, 吉里瞳子, 矢野環 重度障がい児の音楽療法場面の音声表現と非言語・前言語コミュニケーション関わる複数の評価同士の時間関係を可視化するために“相互相関分析”を用いた結果を発表した。分析事例では、前言語表現と音声表現が同時に出現し、音楽・身体表現と音声表現の間に長いタイムラグが存在することが示された。
6. IMPORTANT CLINICAL INFORMATION IN MUSIC THERAPY（査読有）	共	2014年7月	MUSIC THERAPY TODAY Summer 2014, Vol.10, No.1, pp.372-373.	Naomi Takehara, Tamaki Yano, Tsutomu Masuko, Tomoko Ichinose, Kakuko Matsumoto, Tomomi Aoki, Megue Yokoya 日本の音楽療法の報告書に用いられる言葉の共起関係を可視化した”ネットワーク分析”の結果に基づき、音楽療法分野における新たな分類・評価法について考察した。分析結果によると音楽に関する言葉が間主観性・自己・他者間の表現・コミュニケーションに関わる言葉と繋がりが示された。
7. 障がい児を対象としたコミュニケーション支援・評価システム構築に関する基礎研究（査読無）	共	2014年3月10日	日本音響学会, 2013年春季研究発表会講演論文CD-ROM, pp.1485-1486	竹原直美, 一ノ瀬智子, 松本佳久子, 青木智美, 吉里瞳子 長時間の音楽療法場面の音声映像に、音楽的発達と言語的発達、臨床関係（遊びの関係）や表現・コミュニケーション行動に関わる重要な情報を総合的に記録・評価・分析するための基礎研究の事例について発表した。
8. 可聴域を超えた音を含む高音質音源の心身へ与える影響（査読無）	共	2013年3月13日	日本音響学会, 2013年春季研究発表会講演論文CD-ROM, pp.1009-1012	一橋 和義, 坂元 勇仁, 竹原 直美, 矢野 環, 今泉 徳人, 時枝 一博, 永井 伊作, 中澤 慶, 奥原 秀明, 山崎 英樹, 伊藤 祐市, 緒方 理恵, 花房 勤, 酒井 哲哉, 岩本 敏孝, 谷澤 哲, 京増 弘志, 京増 雄介, 坂口 源, 鈴木 政直, 舛川 智子, 小山 茂 可聴域を含む多様な音源の心理評価に関する基礎研究の結果を発表した。
9. 可聴域を超えた音を含む高音質音源の脳活動に与える影響—光トポグラフィーによる計測の試み—（査読無）	共	2013年3月13日	日本音響学会, 2013年春季研究発表会講演論文CD-ROM, pp.1013-1014	竹原 直美, 一橋 和義, 矢野 環, 坂元 勇仁, 今泉 徳人, 奥原 秀明, 時枝 一博 可聴音域を超えた音源DVD96kHzと可聴域によるCD44.1kHzの音源2種（音楽：シューマンピアノ五重奏曲・環境音：海の波の音）の聴き比べを行い、各音源の聴取者に対し、光トポグラフィーによる脳活動の計測を行った結果を報告した。
10. 歌唱中の脳波Fmθと定量神経活動について—個人、小集団における認知・情緒・生理的側面の定量的評価—（査読有）	共	2012年3月31日	文化情報学, 同志社大学文化情報学会, Vol.7(2), pp13-20	竹原直美, 長谷川裕紀, 矢野環 音楽療法場面で幅広く用いられている歌唱の様々な形態に着目し、歌唱中の脳波Fmθと自律神経活動の分析により、音楽演奏中の治療的効果（認知・情緒・生理的側面）を統合的・定量的に評価するための基礎研究を行った。結果より、緩やかなテンポで運動量の少ない馴染みの曲の歌唱は、歌詞を話すこと・イメージすることと比較して、心地よい心理状態、生理的な鎮静化を促すことが示された。
11. 音楽療法の質的事例報告に関する計量的分析の試み（査読無）	共	2011年5月14日	情報処理学会, 研究報告—人文科学とコンピュータ (CH), Vol.2011-CH-90, No.4, p1-5	竹原直美, 矢野環 音楽療法士により記述された質的事例報告を対象とし、臨床における多様な相互関係の中から、「セラピストはクライエントの何をみてきたか？」という点を、計量言語学的に明らかにするための基礎研究の結果を報告した。
12. RELATIONSHIPS BETWEEN FMθ AND THE AUTONOMIC NERVOUS SYSTEM IN SINGING AND SPEAKING（査読有）	共	2011年	Music Therapy Today summer 2011, vol.9, No.1, pp.48-49	Naomi Takehara, Hiroki Hasegawa, Tamaki Yano 言葉を話す時と歌う時の効果の違いについて実験を行った結果を発表した。結果では、歌唱時は言葉話す時と比較して、注意集中よりも心理的高揚や生理的鎮静を促すことと関係することが示唆された。また歌唱形態による効果の違いでは、独唱が最も心地よい状態と関連する結果が示された。
<b>その他</b>				
1. 学会ゲストスピーカー				

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
1. 図形楽譜がイメージ喚起と演奏に与える影響について	共	2016年9月18日	第16回 日本音楽療法学会学術大会要旨集, p.91	吉田紗奈, 松本佳久子, 竹原直美 図形楽譜における図版の特徴や教示方法によるイメージ喚起と即興演奏に与える影響について検討した結果を報告した。 心理評価と記述アンケートのテキスト分析の結果より、「標準型」に多様な感情価が関連し、さらに図形楽譜の「外向型」「標準型」の演奏後には図版から演奏自体への評価へと反応語が変化した。「内向型」は無彩色図版のみ前後で変化が見られ、無彩色で具体的形状の図版を用いることは侵襲性が低く、各性格類型の反応の特徴をより引き出すことが示唆された。
2. 子どもの発達支援における音楽療法の評価の検討～3年間の報告と実施された音楽活動の分類の試みから～	共	2016年9月17日	第16回 日本音楽療法学会学術大会要旨集, p.116.	竹原直美, 吉里瞳子, 青木智美, 諸岡由依, 一ノ瀬智子, 松本佳久子 子どもの発達支援における音楽療法に用いられる活動の κατηγοリーをマインドマップ・KJ法により分類し、従来の評価視点と比較した。 従来の評価では、「内容理解・適応」「行動・集中」の伸び率が高く、新たな分類では「感覚・認識」「学習」の項目が与えられた。
3. Time-series analysis of communication behavior in music therapy sessions for children with severe disabilities: Support for vocal expression using cross-correlational analysis	共	2016年7月28日	32nd World Conference, International Society for Music Education (ISME), Glasgow UK	Naomi TAKEHARA, Tamaki YANO, Tomoko ICHINOSE, Kakuko MATSUMOTO, Tomomi AOKI, Toko YOSHIZATO 音声・映像の注釈データの時系列分析(相互相関分析)により、重度障がい児の発声・喃語が多くなった時期には、臨床者への視覚注意と他への注意の周期的な関係が示されたことを報告した。
4. 認知症予防のための音楽療法の基礎的検討～電子楽器を用いた合奏システムの構築～	共	2016年4月28日	日本生体医工学会オーガナイズドセッション, 30S2-3-52016 <Transactions of Japanese Society for Medical and Biological Engineering, vol.54 (PROC)>	赤澤堅造, 奥野竜平, 一ノ瀬智子, 竹原直美, 本佳久子, 益子務 高齢者の音楽療法に用いることのできる合奏システムを開発・試行・評価した内容を報告した。
5. ラウンドテーブル 臨床から研究へ、研究から臨床へ～音楽療法士のための研究ノウハウ～	共	2016年3月16日	第14回日本音楽療法学会近畿学術大会	企画者・司会者: 長谷川裕紀 話題提供者: 長谷川裕紀, 河村美帆, 竹原直美 『臨床から研究へ』と題して、音楽療法の臨床研究についての課題と、研究手法(臨床研究に用いることのできるチェックリストや定量評価・分析方法)について発表し、今後の音楽療法研究に期待されることについて議論した。
6. 認知症予防のための電子楽器演奏システムの開発～知的機能刺激に着目した基礎的検討～	共	2015年9月26日	第5回日本認知症予防学会学術集会, 2A-12	赤澤堅造, 益子務, 一ノ瀬智子, 松本佳久子, 竹原直美, 青木智美, 奥野竜平 認知症予防のための電子楽器を用いた楽器演奏システムとその評価について発表した。
7. 認知症予防を目的とした楽器演奏の基礎的検討～認知機能刺激の認知科学的計測法～	共	2015年9月13日	第15回 日本音楽療法学会学術大会, p.79	赤澤堅造, 益子務, 一ノ瀬智子, 松本佳久子, 竹原直美, 青木智美 電子楽器Cymisの演奏には、どのような認知機能が必要であるかを調査するために、演奏結果と心理評価、脳波Fmθ波による評価を行った。
8. 重度心身障害者のための音楽療法評価手法の構築に向けて～事例による予備的考察～	共	2015年9月12日	第15回 日本音楽療法学会学術大会, p.49	林栄理菜, 一ノ瀬智子, 竹原直美, 益子務 重度心身障がい者のための音楽療法の評価について、既存の指標や新しい評価スケールを作成し、評価手法の構築・検討を行った。 Audactyによる音声波形表示を用いた音楽演奏場面の評価が、対象や職員に理解しやすく、対象の活動への意欲向上につながった過程が示された。また、オリジナルの評価スケールと生理指標を主成分分析にかけることにより、対象の目標への達成度と生理・心理面を、活動ごと回数ごとに比較して変化をみる事ができた。
9. 発達障がいの疑いのある就学前児への集団音楽療法による社会性促進～ELANを用いた行動観察による評価を中心とした事例研究	共	2015年9月12日	第15回 日本音楽療法学会学術大会, p.42	串田加奈, 竹原直美, 青木智美, 松本佳久子 発達障がいの疑いのある児童を対象とした集団音楽療法場面の遊び行動の観察と言語・コミュニケーション行動について、2事例の観察評価を行った。結果では、音楽療法場面において、他者との関わりを必要とする連合遊び・協同遊び行動が増えたことに伴い、対物・対大人への視覚注意によるコミュニケーション行動が増加したことが示された。
10. “大切な音楽”によって示されるものと語られるもの～少年受刑者へのグループカウンセリングにおける語りのコンテクストの分析～	共	2015年11月28日	第47回日本芸術療法学会, p.25	松本佳久子, 竹原直美 少年受刑者への音楽療法の語りにおける文脈の時系列変化を可視化するための手法として、言語計量分析を用いた研究手法の検討を行い、事例の考察を行った。
11. Applying a Novel Electronic Musical Instrument and Kinect in Music Therapy for Children with Autism Spectrum Disorders A	共	2015年10月	World Congress on Education 2015, p.90	Tomoko Ichinose, Naomi Takehara, Kakuko Matsumoto, Tomomi Aoki, Toko Yoshizato, Ryuhei Okuno, Shinichi Watabe, Katsumi Sato, Tsutomu Masuko and Kenzo Akazawa

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
uthors				<p>バリアフリー電子楽器Cymis（サイミズ）とKinectを使用した、自閉症スペクトル障がい児のための音楽療法の臨床例を紹介した。</p> <p>*Best Paper Award受賞</p>
12. 障害児への音楽療法における親の心理的变化について～母親へのインタビューとアンケート調査の事例から～	共	2014年9月21日	第14回 日本音楽療法学会学術大会, p. 227	寺岡千紘, 吉里瞳子, 竹原直美, 松本佳久子 障がい児の音楽療法場面・生活場面におけるコミュニケーション・関わり行動の変化と保護者の心理的側面の変化について調査した結果を報告した。
13. 音楽と映像の相乗効果が気分と印象に与える影響	共	2014年9月21日	第14回 日本音楽療法学会学術大会要旨集, p. 211	松野純男, 向畑美菜, 竹原直美, 松本佳久子, 一ノ瀬智子, 長谷川裕紀 音楽と映像のずれの影響について発表した。結果では、ダンス経験者において、課題ごとの印象の変化を敏感に認知する傾向を認めた。また、主成分分析を用いることで、この変化が精神的な「緊張」「緩和」に基づくものであることが示された。「緊張」「緩和」の指標として、唾液中s-IgAが有用な生体指標になる可能性が示された。
14. 電子楽器サイミス演奏時の脳波Fmθの計測～認知症予防のための脳活性化の楽器演奏を目指して～	共	2014年9月21日	第14回 日本音楽療法学会学術大会要旨集, p. 125	赤澤堅造, 一ノ瀬智子, 松本佳久子, 竹原直美 障害者施設等、国内16の機関で導入されている”電子楽器サイミス”の生理学的・認知的アプローチに関する基礎研究について、認知症予防における楽器演奏の意義と、サイミズの演奏においてFmθが発現することが確認された結果を報告した。
15. ELANを用いた音楽療法の臨床記録・評価の構築・分析に関する基礎研究Ⅱ～広汎性発達障がい児の音楽療法場面における遊びと社会的発達の変化の分析事例～	共	2014年9月20日	第14回 日本音楽療法学会学術大会, p. 110	増田沙耶香, 竹原直美, 青木智美, 松本佳久子 広汎性発達障がい児の音楽療法中の遊びの社会的参加度と表現の主張性・協調性、セラピストの関わり方の変化について音声映像を通じた評価を行った。結果では、遊び行動の変化より、社会性発達の向上が示され、セラピストの関わり方の変化には、対象児童の社会性の発達の変化が反映されていることが示された。
16. ELANを用いた音楽療法の臨床記録・評価の構築・分析に関する基礎研究Ⅰ～重度障がい児の音声表現・コミュニケーション場面に注目した分析事例～	共	2014年9月20日	第14回 日本音楽療法学会学術大会, p. 109	竹原直美, 一ノ瀬智子, 松本佳久子, 青木智美, 吉里瞳子 音声映像に直接注釈をつけることのできるELANを用いた音楽療法の臨床評価法について紹介した。重度障がい児の音楽療法における対象児・臨床者間の表現・コミュニケーションを可視化・定量化するための評価・分析手法について発表した。
17. IMPORTANT CLINICAL INFORMATION IN MUSIC THERAPY	共	2014年7月8日	World Congress of Music Therapy 2014 Abstracts POSTERS, P0023, July 7-12, 2014, pp359-360.	Naomi Takehara, Tamaki Yano, Tsutomu Masuko, Tomoko Ichinose, Kakuko Matsumoto, Tomomi Aoki, Megue Yokoya 日本の音楽療法の報告書に用いられる言葉の共起関係を可視化した”ネットワーク分析”の結果に基づき、音楽療法分野における新たな分類・評価法について考察した。分析結果によると、音楽に関する言葉が間主観性・自己・他者間の表現・コミュニケーションに関わる言葉と繋がりを持つことが示された。
18. 言葉のつながりから音楽療法の臨床を理解する～2001年～2010年の児童領域における質的事例報告の計量分析を通じて～	共	2013年9月7日	第13回 日本音楽療法学会学術大会要旨集, p. 91	竹原直美, 青木智美, 横家愛恵, 一ノ瀬智子, 松本佳久子 ネットワーク分析により、過去の児童領域の報告書に用いられる言葉と言葉の関係（つながり）に注目しながら、児童領域の臨床場面における多様な臨床情報の関係性について発表した。
19. 音楽療法の報告書に関する計量分析の試み～児童領域の臨床研究に必要な情報を探る～	共	2012年9月9日	第12回 日本音楽療法学会学術大会, p. 80	竹原直美, 青木智美, 一ノ瀬智子, 松本佳久子, 横家愛恵 音楽療法士の観点を計量言語的に明らかにするための基礎研究として2001～2005年度の日本音楽療法学会学術大会要旨集より、児童領域の事例報告文書の関連用語分析を行い、その結果を報告した。
20. 音楽療法の質的事例報告に関する計量分析の試み～歌唱とこころ・からだ・社会に着目して～	共	2011年9月10日	第11回 日本音楽療法学会学術大会要旨集, p. 74	竹原直美, 一ノ瀬智子, 松本佳久子 音楽療法の多量の事例報告を計量的に分析する試みを行い、歌唱と関連がみられる言葉の抽出結果と、大会のテーマであった、こころ・からだ・社会に着目した分析結果を発表した。
21. Relationships between Fmθ and the autonomic nervous system in singing and speaking	共	2011年7月	The 13th WFMT World Congress of Music Therapy	Naomi Takehara, Hiroki Hasegawa, Tamaki Yano 言葉を話す時と歌う時の効果の違いについて実験を行った結果を発表した。結果では、歌唱時は言葉話す時と比較して、注意集中よりも心理的高揚や生理的鎮静を促すことと関係することが示唆された。また歌唱形態による効果の違いでは、独唱が最も心地よい状態と関連する結果が示された。
22. 歌唱活動が注意集中・情緒に与える影響について～歌唱中の脳波Fmθと自律神経活動に関する基礎研究～	共	2010年9月25日	第10回日本音楽療法学会学術大会要旨集, p. 65	竹原直美, 長谷川裕紀 歌唱の効果を実験・分析するための基礎研究について、少数データにより個々の実験事例の課題に対するFmθ power・自律神経系活動の評価と、ウェーブ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
23. 音楽を聴いているときの心と身体 の関係性について～脳波・心電図 ・呼吸の生体情報を用いて～	共	2009年9月12 日	第9回日本音楽療法学会 学術大会要旨集, p. 46	ット解析による脳波の時系列分析の結果について発表 した。 竹原直美, 長谷川裕紀 音楽聴取における多面的感情・音楽の印象評価、生 体情報（脳波・呼吸・心電図）の関係について、系 統学の研究手法を用いて分析を行った結果を発表し た。
24. 音楽聴取における主観評価と生体 情報の関係について	単	2008年8月31 日	第8回日本音楽療法学会 学術大会要旨集, p. 183	竹原直美 音楽聴取における多面的感情の評価・音楽の印象評 価、生体情報（脳波・呼吸・心電図）の関係につい ての基礎実験を行い、少数データによる主成分分析 の結果を発表した。
<b>3. 総説</b>				
<b>4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
1. 集団歌唱による気分の変化：音 楽療法セッションを模して	共	2017年5月14 日	第29回音楽の科学研究 会	赤城史穂, 河瀬諭, 竹原直美, 一ノ瀬智子, 益子務 集団歌唱により、一体感とフローが有意に上昇し、 曲順による音楽ダイナミクスに沿った変化がみ られた。また、不安の減少と、ポジティブな気分（ 活動的快・親和）の上昇がみられた。これらのフ ロー状態、気分、音楽ダイナミクスの関連を定量的 に確認することができた。
2. 第14回近畿学術大会・講習会受講 者アンケート結果報告	共	2016年	近畿音楽療法学会誌, V ol15, pp. 139-172	大前哲彦, 川村美帆, 竹原直美, 松下裕美, 山田由 紀子 第14回近畿学術大会・講習会受講者アンケートの集 計結果を報告した。
3. 重度障がい児の音楽療法場面（発 声・楽器活動）におけるコミュ ニケーション行動の評価・分析	共	2015年11月2 2日	第28回音楽の科学研究 会	大浦夏光, 竹原直美, 松本佳久子, 一ノ瀬智子, 青 木智美, 吉里瞳子 重度障がい時の音楽療法中の音声コミュニケーション の表現時間と表現パターンの時系列変化を注釈ソ フトELANを使って評価した事例について報告した。
4. 第13回近畿学術大会・講習会受講 者アンケート結果報告	共	2015年	近畿音楽療法学会誌, V ol14, pp. 139-172	大前哲彦, 川村美帆, 竹原直美, 松下裕美, 山田由 紀子 第13回近畿学術大会・講習会受講者アンケートの集 計結果を報告した。
5. 障がい児を対象とした音楽療法の 臨床評価システム構築に関する基 礎研究～ELANを用いた音声・映像 記録の評価と分析～	共	2014年6月22 日	第26回音楽の科学研究 会	竹原直美, 増田沙耶香, 松本佳久子, 一ノ瀬智子, 青木智美, 吉里瞳子, 矢野環 映像音声の蓄積・分析を通じた新たな音楽療法の評 価・分析事例を紹介した。
6. 子どもに対する歌いかけと 母親 の育児自己効力感・気分状態との 関連	共	2014年6月22 日	第26回音楽の科学研究 会	諸岡由依, 竹原直美, 青木智美, 小花和 Wright 尚 子 母から子への歌いかけによる効果やその要因につい ての調査・実験研究の結果を発表した。歌いかけ頻 度よりも、母親による歌いかけ頻度の認識が育児自 己効力感に影響し、遊び場面での歌いかけが、歌い かけを行っている実感を母親に与えることや、母親 の歌いかけによって、子どもが「母親の顔をじっと みる」反応が、育児自己効力感に関連することが示 された。
7. プロ野球の応援歌が及ぼす生理的 ・心理的影響	共	2014年6月22 日	第26回音楽の科学研究 会	岩本 まみ, 松野純男, 長谷川裕紀, 竹原直美, 青木 智美, 吉里瞳子, 松本佳久子, 一ノ瀬智子 野球ファン・性別の属性間で応援歌への生理・心理 反応の違いについて調査したところ、阪神ファン女 性に楽曲間での心理反応の違いがみられた結果を 発表した。
8. 音楽療法の実践と教育におけるテ クノロジー活用—2000年以降の文 献レビューを中心に—（査読有 ）	共	2014年3月	音楽教育実践ジャーナ ル, Vol. 11. No. 2, p. 6 0-65. 日本音楽教育学会	一ノ瀬智子, 竹原直美, 松本佳久子, 渡部信一 音楽療法の領域におけるテクノロジー活用の状況、 テクノロジー活用に対する音楽療法士の意識、なら びに養成教育におけるテクノロジー活用の観点から 、音楽療法の実践と教育におけるテクノロジー活用 に関する文献レビューの結果を報告した。
9. 第12回近畿学術大会・講習会受講 者アンケート結果報告	共	2014年	近畿音楽療法学会誌, V ol. 13, pp. 138-153	一ノ瀬智子, 大前哲彦, 竹原直美, 山田由紀子 第12回近畿学術大会・講習会受講者アンケートの集 計結果を報告した。
10. 音楽療法の臨床研究における重要 な情報とは？～2001年から2010年 の日本の音楽療法の報告書にみら れる言葉の特徴から～	共	2013年6月9 日	第24回音楽の科学研究 会	竹原直美, 矢野環, 青木智美, 横家愛恵, 松本佳久 子, 一ノ瀬智子 音楽療法の実践に関わる人がどのような考え・視 点を持って対象者に働きかけてきたのかという点を、 過去の音楽療法に関わる多量の報告書を計量的に 分析することにより、全人的な音楽療法の概念を系 統的に把握することを目的とした研究を行った結果 を報告した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
11. 第11回講習会参加者アンケート結果の「分析」等	共	2013年	近畿音楽療法学会誌、Vol. 12, pp. 142-170	辻睦子、一ノ瀬智子、大前哲彦、竹原直美、山田由紀子 第11回講習会参加者アンケート分析結果を報告した。
12. 音楽療法の報告書に関する計量分析の試みー臨床研究に用いられる言葉の特徴から音楽療法の科学的視点を探るー	単	2012年2月26日	第20回音楽の科学研究会	竹原直美 音楽療法の質的研究と量的研究での言葉の用いられ方の違いについて、報告書の文章を計量的に分析した結果を発表した。音楽療法の科学的・感性的な研究法の齟齬の問題に触れ、今後必要とされる音楽療法分野の臨床研究の視点について述べた。
13. 歌唱活動が注意集中・情緒に与える影響について ～歌唱中の脳波Fmθと自律神経活動に関する基礎研究～	共	2011年2月27日	第18回音楽の科学研究会	竹原直美、長谷川裕紀、矢野環 能動的な音楽療法の効果測定のために脳波Fmθと自律神経活動の計測を行なった実験結果を発表した。また、多様な量的指標と質的指標を統合的に分析可能な手法であるMFA分析について紹介した。
14. 音楽療法のエスノグラフィ的な臨床研究 ～質的研究からみえてくる科学的視点～	単	2011年10月19日	第9回同志社大学文化情報学研究科研究発表	竹原直美 コミュニケーションに困難のある対象者2事例のエスノグラフィ的な臨床研究の経過より、言葉の発達に心配のある幼児・児童の音楽療法の記述評価において重要な視点を、質的研究の観点から考察した内容を発表した。
15. 音楽を聴くことによる心と身体への影響ー心拍、脳波、呼吸の観点からー	単	2009年3月14日	第11回音楽の科学研究会	竹原直美 音楽聴取における心理評価と生体情報の関係について、系統的分析を行った修士論文の結果を発表した。
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
1. ICT（情報通信技術）を活用した障害児のための音楽療法	共	2017年4月から現在	基盤研究(C) 分担 代表：一ノ瀬智子	
2. 発達障害におけるコミュニケーションの文脈に視点を置いた音楽療法プログラムの構造化	共	2015年4月から現在	基盤研究(C) 分担 代表：松本佳久子	
3. 発達障害児への音楽療法におけるICT（情報通信技術）を活用した楽曲演奏	共	2014年4月から現在	基盤研究(C) 分担 代表：一ノ瀬智子	
4. 音楽療法場面の映像記録の時系列分析を通じた対象児・臨床者間の相互作用と自我形成	単	2013年から2014年	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究活動スタート支援	

学会及び社会における活動等

年月日	事項
	日本音楽療法学会 会員 日本音楽療法学会 近畿支部 メディア委員（アンケート集計委員） 日本音響学会 会員 日本芸術療法学会 会員